第４回　鳥取市市民自治推進委員会　議事概要

１　日　時　平成２６年１２月３日（水）１５：００～１６：４５

２　場　所　鳥取市役所本庁舎　４階第２会議室

３　出席者

（１）委　員　　池井委員長、佐藤委員、上田委員、福島委員、岡村委員、高塚委員（順不同）
委員出席者６名

（２）鳥取市　　岡本協働推進課課長補佐、岡田協働推進課主任、山下佐治町総合支所地域振興課主任

（３）傍聴者　　なし

４　先進的活動団体との勉強会

（委員長）
　今回は、佐治地域に対象を絞って、新市域振興アドバイザーである蕎麦栽培グループの「蕎麦人の会」会長　田中早雄さんと、今年度から取り組んでいる佐治の地域おこし協力隊の多田伸治さん、阿久津和也さん、柿崎文靖さんにおいでいただいた。それぞれ活動状況などの話の後、質疑応答の時間とさせていただきたいと思う。

≪蕎麦栽培グループ「蕎麦人の会」会長　事業説明≫
≪佐治地域おこし協力隊　隊員３名　事業説明≫

（委員長）
　委員からの質問をお受けする。

（委員）
　地域おこし協力隊３名の役割分担や取り決めがあるのか。農地の耕作放棄地再生や地域資源の利活用促進のように重なっている部分があるので、役割分担されているのかと思うがどうか。

（地域おこし協力隊）
　地域おこし協力隊募集時に示された３つの活動のテーマに対して、それぞれ応募しているので、その活動をするということで入ってきている。

（委員）
　地域おこし協力隊として赴任してから活動内容を決めるのではなく、こういう事業をしてほしいと決まっているということか。

（地域おこし協力隊）
　大まかなところはそうだ。

（委員）
　米の話があったが、鳥取でも山のほうで、米のおいしいところが何か所かあるが、そういうところは大抵契約農家になっている。収穫量が少ないとそうならざるを得ない面があるが、契約農家を増やしていく活動はあるのか。

（地域おこし協力隊）
　今開発しているのが、ハップという岩美の海藻肥料を使った米を、現在３名で作っていて、今後増やしていきたいと考えている。集落営農をして、こだわりをもった米をみんなで作るので、取り扱いの交渉をしてくれないかという話もある。

（委員）
　チコリや桑の木といった多彩な栽培をされているが、どういった観点から選ばれているのか。

（地域おこし協力隊）
　我々が提案したのではなく、やる気のあるグループがあって取り組んでいるもので、チコリは根が漢方薬になるので、根に関しては全量を「ゼンヤクノー」が買い取ってくれる。根を除くと葉の部分があり、その売り先をどうするのかが議論になっている。桑についても、「ゼンヤクノー」が「桑の葉茶」にするため乾燥重量何ｋｇでいくらかということで買い取ってくれるということがあり、取り組んでいるものである。

（委員）
　隊員から「これを作ってはどうか」と提案して実現したものはあるか。

（地域おこし協力隊）
　６月に赴任して、まだ農業をしっかりやっているわけではないので、そういうことはない。

（委員）
　制度の問題かもしれないが、地域おこし協力隊活動は役割が決まっていて、３年ぐらいでやっていくことのようだが、何年かやっていくと自分たちの課題が見つかると思うが、それが実現する仕組みになっているのか。

（地域おこし協力隊）
　それは、個人的に頑張るしかないと思う。自分の生活の地盤を大事にすることがまず大切。自分の暮らしている集落のことや伝統芸能などにも積極的に参加するようにしており、ここからいろいろ派生するものがあると考えている。協力隊の活動には入らなくても地域の一員になるということで大きく力を入れて頑張っている。

（委員）
　活動内容がたくさんあり、率直に１人や２人でこれが全部できるのかと思うが、逆に言えば、地域の方を巻き込んでやっていかなければいけないと思う。隊員だけが必死に働いて、住民たちが見ているのではなく、一緒になって活動していく巻き込み方はあるか。

（地域おこし協力隊）
　これは、一番難しい点であると思っている。地域おこし協力隊がいることは、「支援」であると思っている。住民が一番動かなくてはいけないと思うが、今は地域の方から個人的に頼まれて動いている。まずはやる気のある方を後押しできればと考えている。暮らしていれば、町の人も見ているので、自分の暮らしを大事にして、しっかり生活することが第一ではないかと思う。そこから自然に派生していくのではないか。協力隊の任務は３年だが、３年後に暮らしていれば、４年目以降も町の事もできるというのが自分の考えである。

（委員）
　協力隊なき後も地域の方は考えなくてはいけないので、そこが気になった。

（委員）
　地元農産物の育成や販路開拓など、地域関係者へのアドバイスや具体的な活動をされているということだが、例えば、遷喬地区での出前販売や大阪での販路開拓などで農産物の搬送はどのような手段で行っているのか。
　佐治の農産物を売るときに、何か地域のブランド化したものをつけて売るような指導をされているのか、一般的に『おいしい野菜』というような売り方なのか、そのあたりのアイデアはどうか。まだ始まったばかりなので、客の反応はどうかといったところをお聞きしたい。

（地域おこし協力隊）
　公民館マルシェの搬送に関しては、今回初めてだったので試験的に行った。かみんぐ百菜が人件費や車の手配をするのは難しいということで、今回は協力隊２名とかみんぐ百菜から１名の計３名でおこなった。車は支所の車を臨時的に使わせてもらって対応した。公民館マルシェの売り上げ自体は良かったが、その売り上げをかみんぐ百菜に持ち帰って話をすると、利益的には、何とか黒字かなという程度だった。経営陣もいるので、今後継続していくかどうかは、現在検討しているところ。ただ、今回は遷喬地区の方にも評判が良く、自分たちも遷喬地区の人たちと交流できたのは楽しかったので、できれば続けたい。
　大阪でのマーケットは、現在、鳥取市の担当者が月に２回ほどかみんぐ百菜まで商品を取りに来て、市職員が大阪まで持って行って販売しているので、配送のコストはかかっていない。大阪の人の反応としては、安いというのが一番のようだ。安くて新鮮な鳥取の農産物というイメージが売りになっていると思う。
　佐治の野菜のブランド化は、特別何もしていない。飯盛山の大根や「河本」という集落にあるリンゴは、結構おいしいと評判なので、簡単ではないが、ブランド化すれば売りにできるかなと思う。

（委員）
　地域おこし協力隊の赴任先として、鳥取市佐治町を選ばれた動機は何か。

（地域おこし協力隊）
　農家になって、農業をやりたかったということがある。国の補助金などいろいろ調べる中で地域おこし協力隊という制度を知った。この協力隊をやりながら、農家を目指すというのもやりやすいかなと思った。佐治町を選んだのは、テーマとして耕作放棄地の再生や農産物に関わるような仕事だったので、その業務内容で選んだ。また佐治町が自然豊かだという点も選んだ大きな理由の１つである。

（委員）
　３年間は地域の方と交流を深めていただき、１つでも２つでも芽がでるようにアドバイスをお願いしたい。
　また、佐治地域の観光面で、組織的な団体を作りたいという提案があったが、地元の方にも呼び掛けているのか。

（地域おこし協力隊）
　個人的な思いで、そこまではまだできていない。ただ、「五しの里さじ地域協議会」の１つの問題として、専任職員が少ないと感じている。今は、事務局の事務員が１人、営業担当が１人に、広報活動をする人がいるという感じである。東京の研修で見たところ、グリーンツーリズムが推進されているところは、専任職員がしっかりいて、体制が築かれている。「五しの里さじ地域協議会」の場合、「さじ弐拾壱」の職員が事務局員をやっていて、片手間でやるような状況になっている。今後佐治町が観光で売っていくのであれば、もっと本格的にやらないと、ただの田舎暮らしなら、いろいろな地域が既にやっている。京都でも綾部市のように京都の市内からちょっと行けば田舎暮らしができる。佐治のターゲットはどこなのか、エリアもちゃんと考えていかなくてはいけない。そのための研修もしっかり受けていかなくてはいけない。小学生の受け入れが無くなったら協議会自体が無くなるのではないかと思っている。

（委員）
　期間終了後、この活動を地域の中で育てていけるようなスタッフや事務局体制、地域の中でこの業務を継続させて、３年間の成果をこの佐治でさらに発展させていくようなものを作るには、今現在の時点から意見交換をしたり、活動できる人が一緒に頑張っていかないといけないのではないかと感じるが、そのあたりはどうか。

（委員長）
　佐治地域は、もともとは１つの村で、合併で佐治支所となったが、村としての機能がないと駄目だし、支所も支えていかなくてはいけない。支所の協力体制に関し、どう感じているか。

（地域おこし協力隊）

他の研修等に行っていろいろ話を聞いてみると、佐治は協力隊に対してとても手厚くしてもらっていると実感している。実際、佐治に来て良かったと思っている。

（地域おこし協力隊）
３年後、この事業で自分が食べていけるかというと、今現在では厳しい。「さじ弐拾壱」の職員が「五しの里さじ地域協議会」の事務局をやっていると言ったが、その職員にちゃんと給料が支払えているかというとそういう状況にもなっていないぐらいの観光客数である。５～８月の小学生１４校の受け入れがメインとなっているので、食べていける状態ではないと感じている。どのように自分が食べていける状況を作るかはもっと練って考えていかなくてはいけない。

（委員）
佐治地域の高齢化率は４０％ととても高いが、一緒になってやっていける人が限られているのではないか。

（地域おこし協力隊）
民泊であれば、非常に可能性があると思う。民泊の受け入れ家庭で考えたときには、高齢者には社会参加できるきっかけにもなるし、高齢者だからこそできるものではないかと感じている。今、核家族化が鳥取県内でもとても進んでいて、小学生と一緒に住んでいる民泊家庭も少ないように思うので、孫世代と関わりあえる機会になっていると感じている。子ども達からすれば、高齢者世代と関われるいいチャンスではないかと思っている。高齢者だからできないという部分もあれば、高齢者だからできるという部分もあると思う。ただ、事務局運営の面で言えば、若い人が絶対必要だと思う。

（委員）
１０年先はどうか。

（地域おこし協力隊）
１０年先は、現状で言えば難しいと思う。

（委員）
子ども達のふるさと体験では、たくさんの子ども達を受け入れられているが、具体的にはどのような体験活動を指導されているのか。
また、グリーンツーリズムに大変関心があるが、食事の提供や佐治の昔話を年配の方が聞かせてあげるといった地域の方々の協力があると思うが、その点で何か課題等があれば聞かせてほしい。

（新市域振興アドバイザー）
子どもにそば打ちをさせるといっても人数の制限がある。現在、多いところでは７０名という小学校もあるが、なるべく小規模な小学校を選択していただいている。そば打ちというのは、基本は１人で打つのがいいが、１鉢で５人前５００ｇを打つので、子ども達には４名か５名で

１つの鉢を打ってもらう。水回し、こね、伸ばし、切り、湯がきという段階があるので、例えば５人なら、３人が水回しをして、次の人がこねてというような役割を分担する。それが子ども達にとっていいのかという思いもあるが、１つ打つごとに５人前できるので、１人ずつ打つと膨大な数ができてしまう。２５人が１人ずつで打つとそれに５を掛けた分量ができる。ある程度の分量のものを打たないとうまくそばが打てない。分量を１００ｇと少なくすればいいではないかという考えもあるが、逆に難しいので、それはやめている。子ども達は５～７ぐらいのグループに分かれて、それにインストラクターを多くて１グループに１人、少なくても２グループに１人つけるようにして、最低でもスタッフ５人ぐらいがインストラクターとして出かけている。会のすべてのメンバーがそば打ちできるレベルに達しているので、誰がインストラクターになってもそば打ちの体験をしていただける。

佐治町には各集落があるが、私の住んでいる余戸というところは独特の雰囲気がある。自分たちの地域が元気になって、それがたくさんの地域に広がっていけば、佐治は発展していくだろうという考え方を基本的に持っていて、やるのであれば、佐治の中で一番初めにやろうという思いが非常に強い集落である。血の気の多い人間がいるので、これをやろうと言えば、それだったら佐治で一番にやろう。自分たちが元気になって、みんなを取り込んでいけば地域が活性化するし、自分たちの地域も活性化していくと思っている。「蕎麦人」を発足したのは、おもしろおかしくするというのが第一のテーマで、自分たちが楽しまないことには、全体的に人は楽しめないというような理念でやっている。

（委員）

地元の方の精神的な面で応援があるということか。子ども達にそば打ち体験を指導して、そばを食べてもらって、子ども達は喜んでいるか。

（新市域振興アドバイザー）

いつも言うのだが、自分で打ったそばは１００％おいしい。誰かが打ったのではおいしくない。自分が手をかけて打ったそばが、一番おいしいということで楽しみながらしてもらっている。

（委員）

食育という面でもとてもいい指導をされていると思う。インストラクターは会員だけか。

（新市域振興アドバイザー）

そうだ。資料には会員数が１５名となっているが、もう少しいて、実質１０名ぐらいがインストラクターができる状況を作っている。そのために毎年どこかのそば処で研修して、自分たちの腕を磨かなくてはいけない。毎年１回は１泊２日で出かけている。「ウスイロヒョウモンモドキ保護の会」の会員も重複しているので、相互の研修ということでチョウのこととそばのことを兼ねて出かけて行っているという状況である。

（委員）

グリーンツーリズムで、農家での宿泊や、都会の若い女性を受け入れて、地域の若い男性と

の出会いの場を計画された際に、利用者の不満や受け入れ先の農家の課題などがあるか。

（新市域振興アドバイザー）
「五しの里さじ地域協議会」が行っている小学生の受け入れは、学校教育の一環で田舎暮らしを体験しに来ているので、当然実施が平日になる。隊員はほとんどが仕事を持ってやっているので、インストラクターの確保が一番改善していかなければいけないところである。民泊の受け入れをしている方は４３戸のうち、以前は４戸ぐらいあったが、現段階では２戸の家庭が主でやっている。民泊家庭がもっと増えればいいと思うが、「五しの里さじ地域協議会」が主母体でやっていて、そこをさしおいて自分たちの集落がおこなうのはおかしなことになるので、それは極力避けたいと思っている。
お客さんからの意見は、楽しかったということで、特に不満は聞いていない。７０、８０歳の高齢者から出る場を作ってくれてありがとうと言われるほうが多い。

（委員）
情報発信として、一般的にはインターネットやホームページなどがあるが、これは成功したというような情報発信があるか。

（新市域振興アドバイザー）
資料の新聞記事で、女性が京都から来てくれた時には、非常に好感触で、自分の仲間を呼んできたいというご意見はいただいたが、それ以降進展はしていない。個人的に連絡を取れる状態にはしているが、敢えてそこまではという思いもあるので、ごり押しはしていない。グリーンツーリズムをしていくうえで、自分たちの集落だけがしていてもいけないので、「五しの里さじ地域協議会」にまずしてもらって、地元におろしていくという方向性がいいのではないかと思う。

（委員）
農家として成長したいという話を聞いて、非常に頼もしく感じたが、今、作物の選定をしているところか。

（地域おこし協力隊）
４月に来て、５月から圃場整備している一部を買わせてもらった。市民農園レベルの広さだが、少量多品種のものを箱詰めのセットにして、インターネットで受注して一般家庭に販売したいので、たくさんの種類の野菜を今回は実験的に栽培してみた。

（委員）
作物の研究中ということだが、こういう支援があればいいなということがあるか。

（地域おこし協力隊）
作ることはできると思うが、販路はまだこれからなので、本当にできるかどうかは不安である。自分で頑張らなくてはいけないところもあるが、そういうところで支援があれば助かる。

（委員長）
　佐治と言えば、はなし、豆腐、そば、アストロパーク、和紙というようにある程度知られたものがある。特に和紙は東京の折り紙の専門家が佐治まで折り紙を買いに来ているぐらいで、いろいろな資源がある。話の中で、立体的というか組み合わせた展開は伺えなかったが、そういうコーディネーターの方はいるのか。天文台で冬空を眺めて、そば打ちして、夜はおばあちゃんの話を聞くというような形のセットにして、グリーンツーリズムや小学生の受け入れでもできないか。

（新市域振興アドバイザー）
　「五しの里さじ地域協議会」が受け入れを行っている子ども達の体験メニューにすべて入っている。１日目は、アストロパークに行って星空観察。その後に佐治の民話の館に寄って佐治谷話。かみんぐ佐治では、和紙の手すき。それをコーディネートという形ではできてないが、「五しの里さじ地域協議会」の体験メニューの中に５つの「し」で「五し」というが、それを体験していただくということで進めている。誰かが集約してコーディネートしていくのが賢明なのかもしれないが、「五しの里さじ地域協議会」がそのとりまとめをやっていて、体験メニューとして、子どもや大人が体験できるという形でやっているのが現状である。

（委員長）
　大阪でいろいろな特産品を売っているというような話もあったが、県の大阪事務所で観光旅行社などを通じて、子どもはともかく、今のようなメニューで、大人への売り物にならないのかなという気がしたので。鳥取市の小学生を集めてというのもいいが、もう少し大きく打ち出すには、みなさん方の協力や県を巻き込んだ動きがないと、このまま終わってしまうのは困るし、高齢化率４０％という話も聞くと心配だが、いかがなものか。

（新市域振興アドバイザー）
　「五しの里さじ地域協議会」の中に、「蕎麦人の会」も入っているが、今後小学生の受け入れが無くなったらどうなるのかということがまず一番にある。今、協議会の中でもそれでは駄目だということで、推進委員会を立ち上げて、来年あと１年あるが、その１年のうちになんとか打開策を考えなくてはいけないと、今、進んでいるところ。「さじ弐拾壱」ではなく、地域おこし協力隊の方にコーディネーターとして入っていただいて、すべてを代わってやっていただくのが今後の打開策ではないかというようなことを「蕎麦人の会」の中ではいつも話している。みなさんがそれぞれ思いを持って、佐治に来ていただいているので、住民サイドとして言わせていただくと、協力隊のみなさんが地域に出かけて行って、地域の方とコミュニケーションをとることをまず第一にしてもらうことによって、これから自分たちの方向性ももっと見えてくるのかなという考え方でいる。たぶん佐治というところはどこの集落に行っても歓迎される。私たちはいい刺激を与えてもらって、今後若い人たちにこういう事業の発展や農業の担い手などをしていただくのがベターかなと考えているので、ぜひとも協力隊員を３年間で終わらせないようにという思いで地域住民の私たちはやっている。この人たちが定住できる空き家を探そうと、今、必死に取り組んでいる。「五しの里さじ地域協議会」でも空き家対策としてやろうと

しているが、今、私たちは、この４名の方にいかに佐治の古民家を提供していくかということを一番にやっていこうと考えている。

（地域おこし協力隊）
　一般のかた向けもやるべきではないかというお話だが、私もそのとおりだと思っている。今年の夏は、ＨＩＳという大手の旅行会社とタッグを組んで、佐治と智頭で民泊をやれたが、来年もやっていこうと思っている。大阪在住の方を対象にした移住定住希望者の受け入れも１２月６日、７日にやって、その中で、「５し」の体験も一緒にやってもらう予定である。今後は空き家を見てもらう予定にもなっている。一般向けと言っても、一般の大人のどの世代を狙うのかが、一番のキーポイントであると思っている。今年夏に武蔵野市の親子が来たが、個人的には、小学生への体験のノウハウを持っている佐治町であれば、この親子というのが一つのキーポイントになるのではないか。子どもだけではなく、大人も楽しめる体験は、一緒になって学べるという意味で佐治町の民泊は、親子がテーマになるのではないかと感じている。

（委員長）
　まだまだ委員もお聞きしたいことやご指導いただきたいことがあるが、時間となってしまった。
　本日は、みなさん非常にお忙しいところをお出でいただきありがとうございました。今日のお話は、市でまとめて上にもあげるので、何かあれば、市なり支所を通じて出していただければと思う。
　それでは、次回の第５回委員会に向けて、事務局から提案があるのでお願いする。

（事務局）
　次回、第５回の委員会では、委員会の任期２年の２年目となるので、まとめとなる意見書の策定について、検討をお願いしたいと考えている。別紙に、意見書の内容について案を載せているので、この内容についてご意見をいただきたい。今日、意見をいただくということではなく、改めて資料をお送りする予定だが、事前にご意見をいただければ、それを踏まえたものを送らせていただこうと思う。まずは、別紙の内容を事前に検討していだたきたいというお願いである。みなさんからいただいた意見をまとめたものを第５回の委員会で検討していただきたいと考えている。

（委員長）
　ここに書いてある意見以外でも項目を加えていいということか。

（事務局）
　はい。

（委員長）
　新しい項目を追加したいときに、他の委員にも広げないといけないが、それはどのように行うのか。

（事務局）
　本日の委員会の議事録等をお送りする際に、次回の委員会へのご意見についても毎回お送りしているので、そちらに書いていただき、意見書の記入にあたっては、また改めてお送りしたいと思う。

５　その他
（委員長）
　次回の日程について、事務局からお願いする。

（事務局）
　委員のみなさんに書いていただいた意見書をまとめて、次回の委員会でご検討いただきたいと考えているので、１月下旬から２月上旬あたりで改めて日程調整をさせていただきたい。

６　閉会　16：45